

儲 叶明 (チヨ ヨウメイ)

中国出身

筑波大学 人文社会科学研究科国際日本研究専攻 博士課程

①研究について

新年度が始まっておよそ一か月が経った。気がつくと、2020 年ははやくも、三分の一が終わろうとしている。ただ、暗いニュースがまだ続いている。テレビをつけても、感染者数の拡大や対応に追われる報道がほとんどである。日本政府の呼びかけよりはやめに「緊急事態」に入った私は、2月からこれまでおよそ 3か月の「軟禁生活」を続けてきた。「軟禁生活」では、何かをやらないと時間が冗長に感じるので、「論文執筆」に専念しようとした。今年は新型コロナの影響でほとんどの学会は【開催中止】となっているため、学会発表での業績稼ぎはまず断念しないといかない。そのぶん、投稿で補おうと、先月と今月は、すっかり缶詰状態になって原稿と奮闘する毎日である。院生になってから気づいたのは、論文を本気で書きたいときは、細切れの一、二時間で寄せ集めて役に立たないということである。一方、大学の授業もほぼ中止となっており、ゼミとともにオンラインの形に切り替えた。「ポストコロナ」という新しい言葉が出てきているが、今後の大学教育形態もそれに伴ってどんどん変わっていくだろう。そのなかで、アナログとデジタルをうまく駆使できる人が、ポストコロナの世界で力を発揮していくのだろうと思う。

②生活について

基本的に隔離生活が続いているが、とにかく

隔離を徹底したいので、今月は電気シェーバーを購入し、はじめて自分で髪を切ってみた。結果は悲惨だったが、当面の間外出はしないので一安心である。あと、大学の授業の形態も自粛に伴ってがらりと変わり、全ての授業のオンライン化に伴い先生たちの授業準備も大変なので、その手伝いをしている。

③コロナを生きる

嫌でも、この標題の内容と向き合わないといけない。SNS では様々な情報(デマも含めて)が毎日物凄いスピードで更新されているが、今月印象深かったのは、以下の書き込みである。

「隔離も特権である」

"Social distancing is a privilege, it means you live in a house large enough to practice it. Hand washing is a privilege too. It means you have access to running water. Hand sanitizers are a privilege. It means you have money to buy them. Lockdowns are a privilege. It means you can afford to be at home. Most of the ways to ward the corona off are accessible only to the affluent."

—Dr Jagadish Hiremath 「隔離」はいかに苦しいかと、世界中の人々が訴えているなか、「隔離する/流動水を使って頻繁に手洗いする/ロックダウンする」、このような皆さんのが「苦しい」と思う物事自体が、一種の「特権」なのだという旨だった。読んでいてなるほど、と思っ

た。

一方、ウェブでは人々の移動が減少することで、気候危機を招く温暖化ガスが減り続けるという報道もあったが、多少過激な話をしてると、温暖化が年々深刻化している地球にとって、もしかして「コロナ」が「ワクチン」であり、われわれ「人間」が一種の「ウィルス」なのかもしれない、と少し思った。コロナで世の中は確実に変わっていく、「人間同士」の関係、「人間」と「地球」、その妙なバランスはいかに取っていくのか、これからではなく、「今・ここ」で質問されている。

この意味で、人間よりは、植物のほうが「地球」と共存する方法をよく知っているかもしれない。



コロナにも負けず、満開の桜。

3月9日、2020年、春於、筑波大学